

---

# 花弁（ボーボボのファンフィクション）

y

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
ボーボボのファンフィクション  
花弁

【Zコード】

Z0603E

【作者名】

y

【あらすじ】

集英社「ボボボーボ・ボーボボ」澤井啓夫先生のファンフィクションです。世界の違いから男は少女を同年代の少年に託し一人去っていくが、その場に自らの本能が現れ心中が曝け出される・・・

## (前書き)

集英社「ボボボーボ・ボーボボ」澤井啓夫先生のファンファイクションです。文章の一部に既存の歌詞をイメージしておりますが、固有名詞、文章を変えております。

「――おーい首領パッチ、ユキ――どこ行つた――?」

ボーボボは周囲を見回した。旅の途中の草原、見渡す限りの青い空  
――一人は何処にも見当たらない

「ちつ・・・はぐれちまたか・・・」

まあいい、その内合流するだろうと歩き出そうとしたボーボボの背  
中に不意に声が掛けられた

「よう。オリジナル、ひつさしぶりだな」

自分と同じ低い声――驚き、振り返つたボーボボの視界に入つた  
のは――

「あの時はよくもやつてくれたよなあ?」

自分と同じ髪、体、サングラス――しかしその肌は浅黒く、髪は  
黒い大男と、その肩に大切そうに抱えられている華奢な美少女

「まつたくだよね」

少女の姿――自分の最も大切な、いや今でもそれは寸分も変  
わることの無い少女の可愛らしい顔。だがその髪は黒く、瞳は紅い  
――

「・・・てめえら・・・?・!」

ボーボボは後ずさる。どうこうことだ?こいつらは俺が――

「あんなんで死ぬわけないじゃん・・・って、アンタ手加減してた  
だろ」

黒い少女は微笑を浮かべている

「なあ、お前――あの子はどこにいんだ?」

黒い大男がボーボボに問いかける

「・・・仲間達とは別れた。皆それぞれの道に向かつて歩き出した」  
ボーボボはその問いに答えたが、目の前の男と少女はいきなり笑い  
出した

「あつはははは!何言つてんの?アンタ?」

「ばつかだなー「コイツ！なあ——————・・・ティ」

「何が可笑しいんだテメエ等！」

ボーボボは思わず声を荒げた

「おつかしいに決まつてんじやん！アンタなんである子連れて来なかつたんだよ？なんだよあの代りみたいなのはさ？あのハジケおチビがアンタをかわいそーに思つて連いてきてやつてんの位分かつてんぢやろ？」

「あんなガキにあの子渡しやがつて、なんだ大人の男でも氣取つてんのか？バツカじやねえの一テメエはいつもそーだな。いつも本当の感情はサングラスの奥に隠しやがつて、結局最後は一人を選んじまうんだなあ」

ボーボボは一人の言葉に心を凍らせられた。ああ、そうだ——

「三世も倒したし、あとは残党狩りだな——ビュティ、行くぞ」「待つてよボーボボ！」

「——ボ・・・ボーボボさんー待つて下さーー・ビュティさんも・・・」

・

「なんだ？ヘッポコ丸。お前は普ップーシティに戻るんだろう？」「は、はい——でも・・・」

「どうしたのへっくん？」

「ボーボボさん！ビュティさんを・・・ビュティと一緒に連れていつてもいいですか？——連れて行かせて下さい！」

「・・・へっくん・・・？」

「俺、俺は——ビュティを一人で守れる力を手に入れようつて・・・ずつとそう思つてました！思い上がりかもしけないけど・・・でも、やつとそれが出来るようになつたと思うんです！だから・・・」

「・・・ボーボボ・・・」

「ビュティがボーボボさんを大好きな」とはuzzと、uzzと知つてました！でも・・・俺はまだボーボボさんよりは弱いけど、それで——絶対ビュティを守つて見せます！守りきつてみせます、か

「・・・」

「・・・へつくん？泣いてるの・・・？」

「・・・ビュティ、お前が決め・・・」

「え・・・私は――」

「いや、連いてつてやれ」

「・・・ボーボボ？」

「ヘッポコ丸はお前を守りたくて守りたくて、必死に修行を積んでこれだけ強くなつたんだ。俺も認める。ヘッポコ丸はもう、一人でもお前を守れるさ。だから連いてつてやんな」

「・・・どうし、て・・・？私が・・・邪魔・・・？」

「んなわけねえだろ。何言つてんだよ。そりや俺もお前のツツゴミがあればスゲー助かるし、一緒に居たいさ。ただよ、一年前ないうざしらず、やっぱリ妙だぜ。お年頃の女の子がこんなオッサンとずっと一緒にいるつてのはよ」

「・・・ボー、ボボ・・・・」

「な？分かつたな。連いてつてやれ。今度はヘッポコ丸を助けてやつてくれよ。なんだかんだでコイツの真拳ツツゴミ所満載だしな」

「・・・ボーボボさん！い、いいんですか・・・？」

「あー。だがな、テメエ、ビュティにかすり傷一つでもつけたらタダじゃおかねえぜ？絶対守りきつてみせろよ。テメエも、もう大人だ。男だ。一度した約束絶対に破るんじゃねえぞ」

「は・・・はい！ありがとうございます・・・！絶対に俺、ビュティさんを守つてみせます！約束します！」

「・・・ボーボボ・・・おわかれ、なの・・・？」

「なんて顔してんだビュティ。心配すんな。あのヘタレ小僧じや手に負えねエ敵が出てきたら俺の名前を叫べ。何処にいたって、何してたつて、一秒で駆けつけてやるよ。お前の声なら地球の反対側にいたつて聞こえるさ。だからよ、安心しな――ビュティ」

「・・・や、だよ・・・」

「大丈夫だから、な・・・いつか会いに行くさ。いつも忘れねえよ。

お前は俺の一一番の仲間だ。永遠にお別れつて訳じゃねえんだ。いつか会えるさ。いつか――」

そして、最後の一――柔らかい感触を確かめる為に、ぽん、ヒ――

ーその小さな頭に手を置いた

「あれ？ 固まっちゃったよ、コイツ」

少女はクスクスと笑いながら、俯き身動き一つしないボーボボを指差した

「テメエはバカだ。ほんまモンの大バカだ。俺を見ろよ。俺はバカでも自分の宝物は間違えねえぜ。テメエの理性を組み込まれなくて良かつたぜホント。なあ――・・・ティ」

「仕方ないさ。コイツは神様の意思には逆らえないんだ。神様にも色々な事情があるってコト。分かつてやんなよ」

ボーボボは笑い合う二人を見た。遙か、遙か遠くに――自分から置いて来てしまった光景をそれに重ねる

「じゃーな、俺等行くわ。テメエは其処で、ずっと同じ場所で、遠くばーーーっか見上げて、自分に嘘つき続けて――ずっと一人でいればいい」

一人はくるりと踵を返すと、ゆっくりとボーボボから離れていった。さくさくという草を踏む音が序々に遠くなつていった

「――せH・・・」

風に吹かれる草の音だけが響く草原に、小さな声が発せられた

「ウルセエんだよでめえら！」

ボーボボが天を仰ぐように顔を上げ叫んだ

「じゃあ――じゃあどうすりや良かつたんだよ！あの子が苦しむのを、泣くのを分かつて俺の感情をぶつけろっていうのかよ！ ンなこと出来るわけねーだろ！ ふざけんじやねえ――！」

ボーボボは自らのサングラスを掴み、それを地面に叩き付けた

「ああ分かってる！俺アあの子がいなきやダメなんだよ！ずっと一人だつた俺の初めて見つけた宝物なんだよ！あんなちいせえ体で俺を庇つて！心配して！ずっと無条件で信じて連いて来ててくれたんだ！」  
ンな大切な存在を泣かせるよーなこと出来るわけねえんだよ！ち

つくしょおおおおーーーー！あいつら見せつけやがつてーーーー！サングラスという精神の壁を外した瞳からは、止め処なく涙が溢れ続け、真下の草を塗らして行く。どうしていいかわからなかつた。

あんなガキに、他の誰にも渡したくなかった。あの少年がいなければ彼女はずつと自分と一緒にいてくれたのか？……違う。彼女は大人になつていくのだ。これから成長し、今は自分を慕つてくれている感情もまた成長していくのだ。成長は変化。彼女と自分では余りに住む世界と時間の流れが違いすぎる。そんなことは分かりきつていた。実際一年経つて再会した彼女はまるで綺麗に咲いた花のようだつた。これから益々美しくなつていくのだ。自分などその美しい成長に置いていかれるだけだーーー

認めるよ。俺はそれが怖かつたんだ。いつかその日が来たら自分がどうなるのか、耐えられるのか

置いて行かれるのが怖かつたんだ

置いて行かれるのは俺の方なんだーーー

あの時ーーー言えばよかつたのか？俺について来いと、ずっとずっと俺の傍にしてくれ、とーーーそんな弱い姿を、あのーーー自分

をヒーローと信じてくれている少女に見せられるものかーーー

「見せりやよかつたんだよ」

ーーーふと、背後から声が掛けられた

「見せりやよかつたんだボーボボ。サングラス外してーーーお前の本当の素顔を」

少し離れた所に、首領パッチが音も無く立つていた

「神様は確かにそうしたかつたけどーーーどうしても出来なかつたけどよ」

「ーーー」

「―――ピュティはわざと望んでたぜ?」

だけどもう遅いんだよ

一度手放した花は、空に舞い上がった花弁は  
決してこの手にはもう戻らない

「―――じゃあ、また花を咲かせりゃいいじゃねえか

「 - - - なに、言って・・・」

「また綺麗な花を咲かせて、会いに行こうぜ」

「――・・・ティ・・・・」

綺麗な花を咲かせられたら  
いつか会いに行く

もしも

もしも俺が

お前に

会える程

花を咲かせられたならば

強くなれたのならば

会いに行く

お前が子供のままでなく

俺がお前への庇護の気持ちのままでなく

そうでなければ

ビューティ

もしも 会えたなら 共に笑おう

(後書き)

読んで下さりありがとうございました

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0603e/>

花弁（ボーボボのファンフィクション）

2010年10月10日03時03分発行